九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「郷土文学」作家としての魯迅と徐玉諾

秋吉，收
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9701

出版情報：中国文学論集. 20, pp.67-84, 1991-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

「郷土文学」作家としての魯迅と徐玉諾

秋　吉　收

一

所謂五四時期、一九一〇年代後半から一九二〇年代にかけて、白話文の提唱を契機とした新文学運動が巻き起こった。言文一致の理念はそもそも一般大衆へ開かれた文学であり、そこに中国の民間（農村）を描いた文学、つまり「郷土文学」の萌芽をみた(1)ことは当然の成り行きと言えるかもしれない。文壇に新境地を開いたこの新しい作風について、文学史の上では次のように定義されている。

「郷土文学」　農村生活を題材とし、かなり濃厚な郷土の息吹きと地方色を有した一部の小説創作を指す。魯迅の小説「孔乙己」「風波」「故郷」「阿Q正伝」等が、その最も早い代表作である。…（中略）…魯迅の導きと影響の下、二十年代中期に文学研究会の青年作家を中心とした郷土文学作家群が出現し、その中には…葉紹鈞、…許欽文、徐玉諾、…台静農、…等が含まれる。

（『中国大百科全書・中国文学II』　一九八六年、中国大百科全書出版社刊　一〇七七頁）

小論で取り上げようとする徐玉諾は、現在の文学史においてあまり重視されているとは言えない。種々の文学史をめくっても、引用文に見える如く郷土文学作家の一人として触れられる程度である。だが一九二〇年代前半当時にあって、彼は文学研究会会員の一人として小説、詩の両面に亘ってかなりの脚光を浴びた作家であった(2)。まず郷土文学と称される彼の小説について、その発表状況からその足跡を辿ってみたい（附表参照）。一九二一年から二二年にかけて、当時の新文学運動を支えた『晨報副刊』に十二篇の小説をたて続けに発表。そして一九二三年

附表　徐玉諾と魯迅の小説発表

	一九二〇年以前	一九二一年	一九二二年	一九二三年	二四年以降
徐玉諾		1月「良心」（『晨報副刊』） 2「一個可怕的夢」（『晨報副刊』） 6「小土車」（『晨報副刊』） 8 短劇「末日」（『晨報副刊』） 8「鍋腰老公」（『晨報副刊』） 8「因為山羊的一段故事」（『晨報副刊』） 8「駱駝家」（『晨報副刊』） 9「一個不重要的伴侶」（『小説月報』） 10「行路」（『晨報副刊』） 11 短劇「微笑」（『晨報副刊』） 11「農夫賈林的死」（『晨報副刊』） 11「晉家媳婦和任花婆」（『晨報副刊』）	7「喜事」（『晨報副刊』）	5「在搖藍裏（其一）」（『小説月報』） 6「一隻破鞋」（『小説月報』） 7「灰色人」（『小説月報』） 8「在搖藍裏（其十）」（『小説月報』） 9「到何処去」（『小説月報』） 12「認清我們的敵人」（『小説月報』） 「祖父的故事」（『小説月報』）	'24・1「往事一閃」（『小説月報』） 以後、共和国成立までに発表された作品は数篇を数えるのみ。
魯迅	5「故郷」（『新青年』）	12（～'22・2）「阿Q正伝」（『晨報副刊』）	7「白光」（『東方雑誌』） 9「端午節」（『小説月報』） 10「兎和猫」（『晨報副刊』） 12「鴨的喜劇」（『婦女雑誌』） 12「社戯」（『小説月報』）	（8月第一小説集『吶喊』出版）	'24・3「祝福」（『東方雑誌』） 「幸福的家庭」（『婦女雑誌』） 以後、'25年にかけて第二小説集『彷徨』に収める諸篇を執筆。
二人の接触		○21年末～22年初め魯迅が徐玉諾に小説集刊行を熱心に勧める	○'23年4月北京にて対面、魯迅が徐玉諾をエロシェンコ帰国に随行させる		

'18・5「狂人日記」（『新青年』）
'19・4「孔乙己」（『新青年』）
'19・5「薬」（『新青年』）
'19・10「明天」（『新潮』）
'19・12「一件小事」（『晨報』）
'20・9「風波」（『新青年』）
'20・10「頭髪的故事」（『時事新報・学灯』）

から二四年にかけては、文学研究会主要機関誌『小説月報』に九篇の作品を集中的に掲載している。特に『小説月報』における彼の存在は顕著で、「一個不重要的伴侶」（十二巻九号）、「一隻破鞋」（十四巻六号）、「到何処去」（十四巻八号）はいずれも巻頭を飾っており、また雑誌の末尾に附された『最後一頁』でも次号の予告としてたびたび徐玉諾の作品を紹介している。読者の反響も活発で、『読後感』欄には合計九篇の論評が掲載される。彼の小説の内容に至っては、『晨報副刊』と『小説月報』に掲載された二十一篇中、十八篇が当時の悲惨な農村の情景を題材としたものであった。

一九二〇年代初頭に出版された各種刊行物にあたっても、これほど一貫して農村文学に取り組んだ作家はあまり見られない。徐玉諾は魯迅と並んで「郷土文学」の開拓者としての役割を担った作家であり、『小説月報』を中心とした彼に対する高い評価もそこに照準を合せたものであったと言うことができる。このように見た時、現在の文学史における徐玉諾評価は彼の実体を伝えているとは言い難い。「二十年代中期に出現した」後進の郷土文学作家、許欽文や台静農らと一括するのは当を得ていないのである。文学史の上で徐玉諾があまり評価されないことについては、彼の作品に頻出する「死」や「鬼（幽霊）」のモチーフが「実事求是」の現実主義から乖離したものとの認識からか、保守的で退廃的思想といった批判も見受けられ、特にその傾向が顕著な初期の『晨報副刊』上の作品群などは概して無視される(3)。しかし、現在に至るまでこうして顧みられることのない徐玉諾の作品に、一九二〇年代当初から誰にも先駆けて注目していた人物がいた。それが魯迅その人であった。以下、小論では「郷土文学」を軸として二人を結ぶ接点について明らかにしたい。

二

徐玉諾と魯迅の間には、実は直接的な交流があった。その事実が徐玉諾本人の口から次のように語られている。

当時、私も多くの熱心な青年たちのうちの一人に過ぎなかったが、わずかに、浅薄で拙い郷土文芸で以て小説と詩を書き、農村の矛盾と戦争で混乱した光景を写し出していた。一体どのように魯迅先生の注意を引きつ

けたのかわからない、再三再四孫伏園氏に言いつけて手紙をよこし、私に、晨報副刊に発表した二十篇足らずの小説を編集して出版するよう伝えると同時に、みずから序文を執筆したいと言うのだ。

（「怎様学習魯迅先生――河南省文聯挙辦紀念魯迅逝世十四周年座談会発言（摘要）」　一九五〇年十月十九日『河南日報』）

〈附記一〉　一九二〇年、魯迅先生は、私の「良心」等二十篇の小説を集めて出版し、長い序文を付したいと、孫伏園を通して手紙で持ちかけられたが、私はそれを婉曲に断った。

…（中略）…

〈附記二〉　一九二二年、私は北京に行き、広告を出して仕事を探し、「何でも売ります」の欄に掲載した。後になって急に、魯迅先生が私にエロシェンコ氏を送るよう伝えられたが、どういうお心であったかわからない。

一九五四年五月四日回想して記す

（徐玉諾詩「始終対不起他――懐念魯迅先生」附記　一九八一年九月三日『河南日報』所載　欒星「魯迅与徐玉諾――紀念魯迅誕生一百周年」より抜粋[4]）

二つの記事から明らかになることは、まず魯迅が徐玉諾に、『晨報副刊』に発表した二十篇足らずの小説を纏めて出版するよう、孫伏園を介して何度も勧めていたこと。もう一つは、魯迅が当時、北京大学の世界語（エスペラント）教師として魯迅宅に滞在していたロシアの盲目詩人エロシェンコ[5]の帰国に、徐玉諾を随行させていたという事実である。ただここで一つ注意せねばならないのは、後者の資料に見える二つの年代が、徐玉諾の記憶の曖昧さから実際とは食い違っていることである。徐玉諾の述懐によれば、魯迅が徐玉諾に小説集出版を勧めたのは一九二〇年になるが、附表からも明白なように一九二〇年には徐玉諾はまだ一篇の小説も発表してはいない。これは明らかに誤りで、魯迅が小説集に纏めようとした徐玉諾の小説が『晨報副刊』掲載のものであったことや、二人の接触時期などから考察すれば、この一九二〇年とは実際には二一年の末から二二年の初めにかけての時期でなくて

はならない(6)。次に、魯迅と徐玉諾の北京における対面の年も一九二二年では矛盾する。まず、徐玉諾は北京に出て「何でも売ります（原文：出賣百物）」の欄に広告を出して仕事を探したと言うが、一九二三年四月の『晨報』「百物出賣」欄が彼のその言葉を裏付けている。

徐玉諾君は各種学校の文学教授或いは各新聞の校正及び各種書記員の職を求む。毎日十から十四時間労働、月俸わずか十二元で請け負う。

（「百物出賣」　一九二三年四月三日・四日『晨報』）

また、同じく一九二三年四月の魯迅日記にはエロシェンコ帰国の記事が見えている(7)。

十六日　曇…（中略）…エロシェンコ君帰国す。

（「魯迅日記　一九二三年四月十六日」　『魯迅全集』第十四巻　一九八一年、人民文学出版社刊　四五一頁）

以上のことから、徐玉諾が北京に来て魯迅と実際に会ったのは一九二三年四月と確定される。

さて、ここで魯迅が徐玉諾に熱心に小説集刊行を促した事実に立ち戻って考えてみたい。魯迅が後進の作家たちを発掘し、援助を惜しまなかったことはしばしば指摘されるが、徐玉諾のような遠く離れた名もない田舎の青年に、魯迅の方からこれほど積極的に働きかけたという例はあまり見られない。では何がそれほどまでに魯迅の心を捉えたのだろうか。冒頭で徐玉諾の文壇での活動について触れたが、ここで改めて彼の経歴を逐ってみよう(8)。

三

徐玉諾は魯迅に遅れること十三年、一八九四年に河南省魯山県の貧困な農家に生まれた。幼い頃より優秀で、辛亥革命後開封に設立された河南第一師範学校に官費入学。古文に長じ、桐城派の後継者と目されるほどであったが、雑誌『新青年』の影響を受け徐々に新思想、新文学を志すようになる。一九一九年の五四運動に際しては河南での「学生連合会」理事を務めるなど、植民地化と軍閥抗争に喘ぐ社会に対して積極的に取り組んだが、運動挫折の後には他の多くの作家たちと同様、彼も文学の世界に身を投じることになる。一九二一年に第一作（白話小説）「良心」が郭紹虞の紹介で『晨報副刊』に掲載されたことを皮切りに、結成されて間もない文学研究会の作家の一人と

して本格的な創作活動に入り、以後の旺盛な執筆活動については附表に見える通りである。作家としての彼の経歴を辿る時、特筆すべきは、彼は他の多数の作家たちのように、認められるとすぐに都市に出て中央の文壇で筆を執るのではなく、自分自身河南の農村に居住したまま、一貫して目前の農村の実状を写し取ったことである。魯迅が小説集に編もうとした『晨報副刊』上の徐玉諾の小説は、そのすべてが故郷河南の地で書かれ、はるばる投稿されて来た「郷土小説」であった。では、彼の生まれ育った河南は当時どのような状況にあったのだろうか。

数百頃数十頃の地主は、汝、魯、宝、郟の各県にいくらでもいた。多くの農民は耕す土地もなく、人々は生きていくことができなかった。餓死することに甘んじない者は捨鉢になって土匪に走り、号令をかければ、往々にして数え切れない人間が寄り集まって来るほどだった。封建的統治者たちは自分たちの搾取制度を保護するために、民団を組織して匪賊討伐を図ったが、民団はまた往々にして土匪と結託した。…（中略）…こうして軍隊と匪賊がかわるがわる相互に転化し、その結果、河南西部に土匪が遍くはびこり、民は安心して生活することができないという状況をもたらした。

（「回憶蹚将生活与軍閥生活」範龍章口述　『河南文史資料選輯』第三輯　一九八〇年、河南人民出版社刊　七四頁）

文中傍点（秋吉附）の魯県がすなわち徐玉諾の故郷魯山県である。当時の河南は軍閥の抗争、匪賊の災害が特に激しく、それに加えて重税に脅かされる農民の暮らしは凄絶を極めていた。その様子はまた徐玉諾の作品中にも如実に反映されている。

まず初めに「駱駝の嫁」という短篇小説を取り上げる。この物語は、家族は皆地主に納める穀物を作るための道具としか見做さない貧しく封建的な家の中で、人間らしい生活も見出せないまま、ついにみずからの命を絶ってしまった一人の女性を描いたものである。

駱駝の嫁はこの時本当に忘れてしまっていた、彼女が今悲惨な状況の中で豆を刈り取っているのだということを。彼女は息子の新児（シンアル）と二人ふわふわと大海原を漂って、別の世界の人間になったように感じていた。…（中略）…駱駝の嫁は、何の決心を生じたのかわからないが、いきなり新児（シンアル）を抱いたまま、我を忘れたように

豆畑から家へと斜めにかけ戻って行った。この小さく低い家屋は、彼女の瞳にはもう彼女の死体を収めるだけしかないように映っていた。…（中略）…（彼女は）突然口から鮮血を噴き出すと、ドッと地面に倒れ込んだ。新児（シンアル）の頭も壁に打ちつけられ、ワァーンの声と共に泣き出した。

（「駱駝家」　一九二一年八月三十一日『晨報副刊』）

次に引用するのは、「鍋腰爺さん」という小説の一場面である。

農夫たちは家屋を焼き払った火をすべて消し止め、また死体をすべて埋葬すると、一軒のボロ小屋の前に戻って来た。そのうち最も年長で、あだ名を鍋腰爺さんという者が、村人たちを慰めてこう言うのだった：「おまえたちこんなことで悲しみにくれちゃならねえ、おいらたちゃこの世界に生きとりゃいつもこうなんじゃ、…（中略）…死とは何じゃ。生きとうっちゅうのはどういうことじゃろう。人はこの世にあっては大海の水と同じなんじゃ、氷に変わろうが、蒸気に変わろうが、虎の小便になったとてやっぱ同じ物で、少しも損するこたあないんじゃよ。生きとったって死んじまうよりなんもいいこたあねえ。このご時世じゃ人やってくのも容易ではないからのう。

（「鍋腰老公」　一九二一年八月二十六日『晨報副刊』）

匪賊に襲われ九人の兄弟をすべて殺された爺さんの言葉を通して、死をも超越したような農村の現実が語られている。

このように徐玉諾の小説全体を通して見た時、そこには色濃く「死」の影が浮び上って来る。一九二〇年代前半に書かれた彼の二十一篇の小説中、十八篇が「郷土」作品であることは前で述べたが、実にそのうちの十四篇は悲惨な現実の中で死んでいった貧しい農民たちを描いたものであった。生と死の交錯する現実世界に対する徐玉諾の意識は、同時期に書かれた彼の詩において、より象徴的に表現される。例えば一九二二年執筆の「人と鬼（き）」と題された詩は、次の文句で始まっている。

人生とは鬼（き）の行く末、
鬼（き）とは人生の行く末、

そしてその後半部分ではこう語りかけるのである。

死せる鬼から生ける人まで、
生ける人から死せる鬼まで、
その間はたった一枚の薄い膜で隔てられるだけ――

（「人与鬼[9]」　徐玉諾『将来之花園』　一九二二年八月、商務印書館刊　二七頁）

このような現実認識は当時の彼の作品を終始貫いて流れており、このため彼は文壇においてもその経歴とともにかなり異色視されていた傾向がある。ただ、かれの描いた「死」の世界をつぶさに観察するに、それは想像の中で造り出された怪談とか幽霊物といった類いのものでなく、あくまでも彼の生きた農村、換言すれば郷土そのものを写し取ったものであった。一九二三年から二四年にかけて『小説月報』誌上を賑わせた一連の小説は、彼が異郷にあって故郷河南の回想を書き綴ったものであるが、そこに描き出される現実世界は正しく「人と鬼」の世界であった。

「深夜、兵隊か匪賊かはわからんが村はずれでひとしきり銃声がした、と思うやたちまち火の手が上がった。その夜は北西からの風が強く一気に燃え熾り、火災は闇夜に荒れ狂ってまるで村全体に火がついたようじゃった。家々の男も女も老いも若きも驚き慌てて通りへ飛び出したが、皆道に倒れて死んじまった。…（中略）…俺たち死んじゃいねえと言うたとて、いったいどうやって生きてけっちゅうんじゃ！…実際は俺たちみんな死んじまったんだ！…俺が気付いた時には何営村はみんな焼けちまって、至る所に死体が転がっとったよ。」

（「到何処去」　一九二三年八月『小説月報』第十四巻第八号）

四

魯迅が徐玉諾の作品に魅かれた意味を探る上で、魯迅自身の著作についてもここで些か検討を加えたい。徐玉諾の作品の多くが「死」をモチーフとしたものであることを見てきたが、魯迅の小説にも頻繁に「死」が出現する[10]。

試みにその数を挙げるならば、『吶喊』と『彷徨』に収められた二十五篇の小説中、十一篇に登場人物の「死」が描かれている。同様に魯迅の著作全体を繙けば、彼もかなり早い時期から「生と死」について問題意識を有していた形跡が窺われるのである。例えば、一九一八年に雑誌『新青年』に掲載された「随感録」には次のように書いている。

フランスのG.LeBonの『民族進化の心理』のなかに、…「我々の一挙一動は、自主的であるようで、実はたいてい死者の牽制を受けている。我々一代の人間と、これまでの数百代にわたる死者たちとをくらべたら、数のうえでとうていかなうわけがない」

（注。ル・ボン：一八四一―一九三一。医者、社会心理学者。「随感録三八」　一九一八年十一月『新青年』第五巻第五号）

また、一九二一年から二二年にかけて『晨報副刊』に連載された魯迅の代表的な郷土小説「阿Q正伝」の序にいう次の言葉も暗示的である。

結局は阿Qの伝記を書くことに落ち着いたが、どうも（私の）脳裏に幽霊（「鬼」）がいるように思われるのだ。(11)

（「阿Q正伝　第一章　序」　一九二一年十二月四日『晨報副刊』）

魯迅の提示する「鬼」、すなわち日本語で言うところの鬼、幽霊とは一体何を意味するのか、その含蓄は深く一概に判断することはできないが、当時の魯迅の思想に迫る一つの重要なキーワードであると考える。この問題について、「阿Q正伝」が実は幽霊（阿鬼）の伝記を綴ったものという丸尾常喜氏の指摘(12)は興味深い。また同じく小説に端緒を求めるならば、一九二四年に書かれた「祝福」の中で、祥林嫂が私に霊魂や死後の世界の有無について尋ねる場面などが思い起こされる。

次に、一九二六年に書かれた「厦門通信」より引用しよう。

たまには散歩に出かけます。共同墓地にです。これはBorelが厦門のことを書いた本の中でとっくに言っていることですが、中国全土が一大墓地なのです。

（注。ヘンリー・ボレル：一八六九―一九三三、オランダ人。一八九二年、通訳として中国に渡る。一九二六年十二月廈門『波艇』月刊第一号　前出『魯迅全集』第三巻『華蓋集続編』所収　三七〇頁）

また、一九二六年の三・一八事件後に激情の中で筆を執った「劉和珍君を紀念して」には次のように記されている。

私は自分の住んでいるところが人の世ではないように思われてならない。…（中略）…造化は、…この淡い紅の血の色とかすかな悲哀のなかで、また人にしばらくは生を偸ませ、人に似て人にあらざるこの世界を維持させる。

（一九二六年四月『語絲』週刊第七四期）

魯迅の著作を辿っていけば、最晩年に書かれた雑感文「死」(13)に至るまで随所にその陰影を求めることが可能である。そしてそこに表出された魯迅の現実認識は、形態の差こそあれ徐玉諾の現実認識にも似通っており、このことは魯迅が徐玉諾に注目した意味を考察する上での一つのヒントを我々に提示している。

五

冒頭の引用文にも言及されるように、魯迅は「郷土文学」の実践的な開拓者であり、その小説の多くはよく知られるように「魯鎮」を舞台とした農村小説、つまり郷土小説であった。このように自覚を持って中国の現実、農村を描くことに取り組んでいた魯迅は、見て来たように一九二〇年代初頭には陸続と農村小説を発表していた徐玉諾に注目したが、それと同様に、下って二〇年代中期以降次々と新しく台頭してきた若い郷土作家たちに対しても終始暖かい目を向け、支援を送り続けたのである。例えば、当時の若い郷土作家許欽文はその回想集『欽文自伝』においてこう述べている。

『故郷』は私の処女作である。…（中略）…この書名は魯迅先生によって決定された。なぜならそれは彼によって『烏合』叢書の第二として編集されたからである。

（一九三六年十一月『欽文自伝』　一九八六年、人民文学出版社刊　六一頁）

許欽文の第一小説集『故郷』については魯迅自身が『中国新文学大系』「小説二集・導言」の中で評価している[14]が、それは魯迅がみずから逐一目を通した上で出版自体にも関わったものであった[15]。同様の事例は、やはり後に郷土作家と称される台静農との交流においても見出せる。次に挙げるのは魯迅の台静農宛書簡からの抜粋である。

あなたの小説、読みおえて、昨日、郵送しました。すべて使えます。

（一九二八年二月二十四日「致台静農」　前出『魯迅全集』第十一巻　六〇九頁）

魯迅の校閲を経て、台静農の第一小説集『地之子』は未名叢書の一冊として上梓の運びとなるのである。若い郷土作家たちが必ずしも許欽文や台静農のように直接的な指導を受けていたわけではないが、当時の先鋭的な雑誌『新青年』や『新潮』、『晨報』などに掲載される魯迅の作品に刺激を受けて筆を執った青年たちが多くいたであろうことは疑いない。また、魯迅が北京大学で講義していた『中国小説史略』の学生の中に、将来の郷土作家たちが何人も含まれていた[16]ことも見逃せない事実である。

このように若い郷土作家が魯迅から影響を受けたことについては、これまでにも多く指摘がなされてきた。しかしその逆の、これら若い郷土作家から魯迅への影響については、あまり論ぜられてはいないようである。だが、同じ郷土作家として魯迅もまた彼らに啓発され多くを吸収していたであろうことは、ここで改めて考えてみる必要がある。

一九二四年に発表された魯迅の短編小説「幸福な家庭」は、一九二三年九月九日に『晨報副刊』に掲載された許欽文の小説「理想の伴侶」に擬えて書かれた。それは魯迅自身がその附記の中で次のように述べていることから明瞭になる。

幸福な家庭――許欽文に擬す

附記：私は去年、『晨報副刊』で許欽文君の「理想の伴侶」を読んで、ふと、この一篇の大意を思いついた。そして彼の筆法を用いて書くのがふさわしいと思った。

（一九二四年三月『婦女雑誌』第十巻第三号）

ただ、魯迅がこのようにいつも影響されたことを言明しているとは限らない。郷土作家として冒頭の資料にも名前の見える葉紹鈞の小説「これでも一人の人間？（這也是一個人？）」は、一九一九年三月、雑誌『新潮』一巻三号に掲載された。同年四月に魯迅は同誌編集であった傅斬年に次のように書き送っている。

『新潮』の「雪の夜」「これでも一人の人間？」「愛情か苦痛か」…は、いずれもいいものです。上海の小説家は夢にも思いつきません。このようにやっていけば、創作に希望が持てます。

（対於《新潮》一部分的意見」　一九一九年五月『新潮』第一巻第五号）

この記述は、魯迅が葉紹鈞のこの小説を発表当初から高く評価していたことを裏付けるものであるが、既に指摘される(17)ように、それに後れること五年、一九二四年に書かれた魯迅の小説「祝福」は、この「這也是一個人？」を下敷きとして発展させたものであった。ここに「這也是一個人？」の梗概を挙げ、具体的に「祝福」との共通点を見てみよう。

彼女は一匹の動物のように生まれ育ち、十五の時、養育費がかさむという理由で嫁に出された。子を生んだが、悪条件の下すぐに死に、家の者の虐待は更にひどくなった。ついに彼女は脱走を図り、街へ出て女中として働くことになる。そこでの生活は、打たれも罵られもせず幸福だったが、ただ、いつも死んだ子供のことを悲しんでいた。ある日、偶然に元の村の人間に出くわし、義父が連れ戻しにやって来る。雇主の夫婦が何とか助けようとするが、結局なすすべもなく、夫の病死の報せと共に連れ帰られてしまう。帰った彼女は、夫の葬儀を出す為にすぐに売られていったと言う。彼女はもともと一頭の牛と何ら変わらないのだ。

（傍線秋吉）

この小説の主人公である女性の形象は、「祝福」の祥林嫂を彷彿させ、また、傍線を付した箇所はストーリーの展開が見事に重なり合う。魯迅の郷土小説「祝福」は、第二小説集『彷徨』の巻頭に配されるように、それは第一小説集『吶喊』に収められた一連の作品を発表した後、一年半というかなりの空白期間を経てから書き出されたものであった。この空白期間については、魯迅の作家としての迷い、行き詰まりといった指摘もある(18)が、空白開

けの最初に書かれた「祝福」が他作からの影響をこれほどまともに受けていたことは、その説の傍証になるかもしれない。そしてここで特に注目したいのは、そのような魯迅が選び取ったのがやはり『吶喊』以来書き継いできた郷土文学だったことであり、更に実際の執筆に当っては若い郷土作家の創作を参考にし、彼の作品の中に溶かし込んでいったという魯迅の態度である。

徐玉諾もまた魯迅に影響を与えた一人であった。先に挙げた許欽文や台静農は、当時魯迅の傍に在ってかなり親しく往来があった作家であるが、面識もなく、遠く離れた河南の地から投稿して来る田舎者の一青年徐玉諾に何度も手紙を書き送り、「自分が序文を書き援助するから小説集を出してみないか」と熱心に勧めたという魯迅の行為から、この若者の作品に描かれた世界が魯迅にいかに強いインパクトを与えたか想像に難くない。

ここで徐玉諾と魯迅の小説発表状況、それに二人の接触の時期に再度注目したい（68頁附表参照）。魯迅が徐玉諾に小説集出版を勧めていた一九二一年末から二二年初めにかけての時期は、ちょうど魯迅の「阿Q正伝」執筆（『晨報副刊』連載）の時期と重なっている。偶然にも魯迅は徐玉諾の小説発表に呼応するかのように、「故郷」発表以来途絶えていた小説の筆を再び手にし、そして「阿Q正伝」の執筆に取り組みながらも、一方で徐玉諾に手紙を書き送っていたのである。魯迅の代表的な郷土小説「阿Q正伝」が徐玉諾の作品に触発されて書かれたなどと簡単に推断することはできないが、少なくとも、当時魯迅の脳裏で徐玉諾という若い郷土作家のことが強く意識されていた事実は看過されるべきではないと考える。

六

一九二〇年代の文壇において、この「郷土文学」の勃興は一体如何なる意義を有していたのであろうか。当時の文壇を回想して「郷土文学」を評価した魯迅の次の言葉にそれは端的に語られている。

恋愛の悲喜、都会の明暗を争って書いていた当時、田舎における生と死、土の息吹きを紙の上に移した

（魯迅「『中国新文学大系』第四集（小説二集）・導言」　一九三五年七月、上海良友図書公司）

魯迅の言葉にみえるように、当時中央の文壇では都会の知識人の生活を描いた作品が多く、中国の大部分を占める農村、つまり社会の底辺を生きる人間の生活を反映したような作品は寥々たるものであった。当時『小説月報』主編の任にあった茅盾が、一九二一年の四、五、六月の応募作品を分類した統計からもその状況が窺い知れよう。

すでに手許にある材料をまとめてみると、大体以下の数種類に分けることができる。

（A）男女の恋愛を描いたもの（七十篇以上）
（B）農民の生活を描いたもの（八篇）
（C）都市労働者の生活を描いたもの（三篇）
（D）家庭生活を描いたもの（九篇）
（E）学校生活を描いたもの（五篇）
（F）一般社会の生活を描いたもの（二十篇前後）

…（中略）…

現在の創作界に対する私のモットーは「民間へ行け（原文：到民間去）」である。

（茅盾「評四五六月的創作」　一九二一年八月『小説月報』第十二巻第八号）

こうした状況に危機感を覚えた都会の作家たちによって提唱されたのが、茅盾の文章の最後に見える「民間へ行け」のスローガンであった(19)。そしてこの「民間へ行け」のスローガンが高らかに叫ばれていた北京に初めて出て来た徐玉諾は、次のような詩を残している。

「小詩一」

この争って驕奢を追い求める世界の中で、
にわかに「民間へ行け」と高らかに声明する者がある、
我々は彼らの厚意にとても感謝している、
だが、我々の兄弟たちは
もともと皆「民間から来た」のだ。

（一九二三年六月『小説月報』第十四巻第六号）

徐玉諾は根底から民間すなわち農村に立脚した作家であった。徐玉諾や魯迅に続く後進のいわゆる「郷土」作家たちは、都会の中央の文壇に身を置きながら体験や回想に基いて「郷土」を書き綴っていたが、これに対し、徐玉諾は河南の田舎にあって郷土の現実を直接に写し出し、そこには「生と死」の現出する凄まじい世界が描かれていたのである。やはり都市作家の一人であった魯迅が徐玉諾の作品に強く魅かれた意味を考える時、見て来たように「死」や「鬼」の世界の共有といった要素も見逃すことはできないが、徐玉諾が、魯迅自身も持ち得なかった真の「郷土文学」作家としての資質を有していたことを認識する必要があるだろう。

冒頭の資料に見えるように、中国近代文学史上、「郷土文学」の枠の中に埋もれてしまっている無名作家、徐玉諾。この作家に光を当てることは、彼の小説集を出版しようとして遂に果し得なかった魯迅の意志をはからずも表明することになると私には思われるのである。

注

1　厳家炎著『中国現代小説流派史』（一九八九年、人民文学出版社刊）「第一章　魯迅、文学研究会影響下的郷土文学」等参照。

2　小論では特に「郷土文学」に位置付けられる徐玉諾の小説に焦点を絞って考察した。

3　例えば、徐玉諾作品の集大成とも言える『徐玉諾詩文選』（一九八七年、人民文学出版社刊）に附された劉忱・劉済献「徐玉諾和他的創作」を始めとして総体的に彼の作品を積極評価したものは殆ど見られない。また、徐玉諾評価の歴史を遡れば、決定的な影響を与えたのは一九三五年、茅盾の『中国新文学大系』「小説一集・導言」であり、共和国成立後、王瑤の『中国新文学史稿』（一九五一年、開明書店刊）における記述を経て、冒頭の引用文に見えるような評価が定着する。

4　新聞記事はかつて河南省文連で徐玉諾と同僚であった欒星氏が、徐玉諾の残した詩「始終対不起他――懐念魯

迅先生」をもとに魯迅と徐玉諾の関係や当時の回想を綴ったもの。引用箇所はその詩に狭み込まれた徐玉諾自筆の附記である。原詩は次の通り：「収拾《良心》作長序、／重托伏園伝心意；／恨我怕名婉拒絶、／事後才知対不起。／北京生活真不易、／〝賣身広告〟無消息；／忽伝指示上東北、／叫我愛羅回国去。／愛羅詛呪《狭的籠》、／魯迅対他起同情。／愚笨無過是玉諾、／辜負先生一片心。」

5　一九二一年五月に日本政府より国外追放命令を受け中国に渡ったエロシェンコは、魯迅翻訳『エロシェンコ童話集』（文学研究会叢書、一九二三年七月）の出版に代表されるように、当時の文壇をかなり賑わせている。彼の作品と中国での活動については、高杉一郎編『エロシェンコ全集（1～Ⅲ）』（一九五九年、みすず書房刊）、藤井省三著『エロシェンコの都市物語』（一九八九年、みすず書房刊）に詳しい。

6　魯迅が徐玉諾に小説集出版を勧めた時期については、一九二三年とする説が一般的である。引用文の筆者欒星氏もこの記事の最後で一九二三年説を打ち出し、また『中国文学家辞典（現代第二分冊）』（一九八二年、四川人民出版社刊）にも明記される。だが今回、この通説は誤りで実は一九二一年から二二年にかけての時期との結論に至った。詳細については、文学史上の問題も含めて別稿にて述べたい。

7　魯迅日記の上ではエロシェンコ送行について、引用した一九二三年の他にもう一箇所一九二二年七月にも記述があるが、これは最終帰国でなくエロシェンコがヘルシンキで開催された世界エスペラント大会に参加した時のものであり、徐玉諾とは関係ない。なお、一九二三年五月二日付『晨報副刊』に掲載された「出京後的愛羅先珂（エロシェンコ）」の筆者〝JN〟とは徐玉諾を指し（「周作人日記・一九二三年四月二十六日」に〝得…玉諾吉林函。〟とある）、また、同年六月一日付『晨報副刊・文学旬刊』掲載の徐玉諾の「小詩」には次のような後記が附されている。「…長春下車、北風氷冽、大雪紛紛、連那好争則強的愛羅先珂（エロシェンコ）先生、也顫抖着叫起「極冷」来！但他尚幻想夜鷹在俄国、…――四月二十四日、玉諾。」

8　参考：拙稿「徐玉諾年譜試稿（上・下）」（一九九〇年十一月『天山牧歌（詩誌）』第九号、一九九一年三月『天山牧歌（詩誌）』第十号）

9　「人与鬼」の全詩は以下の通り：「人生是鬼的前程、／鬼是人生的前程、／人的習慣説：／「死」是可怕的、

可悲的、／「鬼」是黒暗的、陰森的、極難堪的――／一種戯角。／那知道鬼們不是這樣説：／「生」是可怕的、可悲的、／「人」是黒暗的、陰森的、極難堪的――／一種戯角。／……／由死鬼到人生、／由人生到死鬼、／中間只隔着一層薄膜――／――這是死鬼和人生的祖先伝給他們的児子的、使鬼和人的孩子們都受他們的生、怕他們的死。従此人和鬼的前程上都立着了一個最大而且最可怕的悲哀。」

10 魯迅の小説に描かれる「死」の形象については、孫立川（青野繁治訳）「魯迅の小説中人物の『死』に関する浅析と比較」（一九八五年、『野草』三五号）や、王潤華（シンガポール）「五四小説人物的〝狂〟和〝死〟与反伝統主題」（『文学評論』一九九〇年第二期）等が示唆に富む。

11 原文は「終於帰結到伝阿Q、彷沸思想裏有鬼似的」である。

12 丸尾常喜「阿Q人名考――「鬼」の影像」（一九八三年、岩波書店『文学』五一号）、「阿Q人名考補遺（六則）」（一九八九年、『野草』四三号）、「祝福と救済――魯迅における「鬼」」（一九八七年、岩波書店『文学』五五号）参照。小論中、魯迅の「鬼（クェイ）」観について多く御教示を得た。

13 一九三六年九月『中流』第一巻第二期。

14 魯迅はこの「導言」の中で許欽文、王魯彦、蹇先艾の三人の作風を「郷土文学」の呼称を用いて明確に規定している。

15 『故郷』の出版については、『魯迅書簡』一九二五年九月三十日付、同年十一月八日付「致許欽文」の中で言及されている。

16 彭定安・馬蹄疾編者『魯迅和他的同時代人（上・下）』（一九八五年、春風文芸出版社刊）等参照。

17 牧戸和宏「五四小説に見られる〈私〉像」（一九七二年、『野草』八号）、張鉄栄「相似的故事　不同的風格――浅談葉紹鈞的《這也是一個人》与魯迅的《祝福》」（『文科数学』（烏盟師専）　一九八一年第一期）等。

18 吉田富夫「魯迅「野草」論」（一九六二年、京都大学『中国文学報』第十六冊）。

19 一九二〇年七月二日付『晨報副刊』に掲載された周作人訳石川啄木の「無結果的議論之後（はてしなき議論の後）」に「民間へ行け」の言葉が見えている。なお、この詩は下って一九二一年八月『新青年』九巻四号掲載の

周作人「雑譯日本詩三十首」の冒頭に挙げられた。今、啄木の原詩より引用する。「はてしなき議論の後」（『創作』明治四十四年（一九一一年）七月号第二巻第七号初収、『啄木全集』第二巻（詩集）一九六七年、筑摩書房刊　一七六頁）

「我等の且つ読み、且つ議論を闘わすこと、／しかして我等の眼の輝けること、／五十年前の露西亜の青年に劣らず。／我等は何を為すべきかを議論す。／されど、誰一人、握りたる拳に卓をたゝきて、／「V NAROD!」と叫び出づる者なし。…」

（注。V narod（ロシア語）－To the PeoPle; be the People.　周作人は「到民間去」と訳している。）

〈追記〉　小論は、一九九一年五月に九州大学で開催された平成三年度九州中国学会大会の口頭発表に基くものである。なお、引用文は、魯迅の著述については一九八四～八六年学習研究社刊『魯迅全集』に依り、それ以外は筆者の拙訳である。